



医療法人三星会 茨城リハビリテーション病院

あさやけ

morning glow



【特集】

嚥下診療における当院の特徴

2020年度
実績報告

2021



院長 篠田雄一
Yuichi Shinoda MD, PhD

リハビリテーション医学とは何か？

それは科学の最先端を医療に応用した学問と私は考えています。1993年私は医師になり、リハビリテーション医学を専門とした時、この専門を志す同期は全国で5人しかいませんでした。現在、リハビリテーションの専門医は毎年年間80名前後誕生しています。21世紀になり、診療報酬上、回復期リハビリテーション病棟が制定され、リハビリテーション科の医師の認知度とニーズも高くなりました。

しかし、このリハビリテーションは他の科よりもより医療としてのチーム医療が求められます。いわゆる多職種連携の中には工学エンジニアリングも入り、多種多様なリハビリマシーンが生まれました。原始的なメカニズムがある中当院においてはEBMに立脚した治療を実践しています。是非、これらの医療を受け現代リハビリテーション医学を実感してください。

一例を挙げますと、当院で導入したIVESは私の出身医局が開発に携わり、脳の可能性を促進するものです。脳の可能性とはいわゆる再生医学のみならずアンチエイジングにも関わる人間のメカニズムです。神経の促進という現象を利用し、人間の潜在能力を引っ張り出す治療です。また、当院には年間500人入院し、開院以来1万人近くのデータが集積し、ビックデータとして治療に活用しています。私自身もリハビリテーション医学会のデータ分析に携わり、日本のリハビリテーション医学のEBMに貢献してきた自負があります。

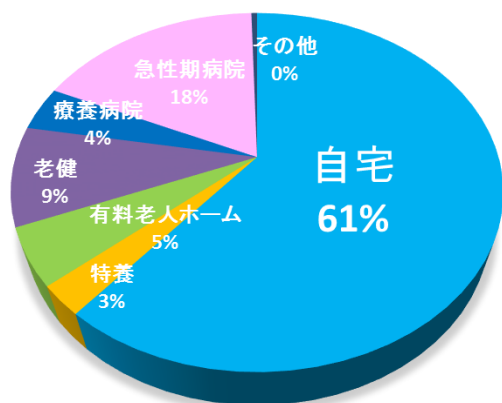
そして、このようなデータ分析と活用がリハビリテーション医療のみならず感染予防にも役立ち、幸い2021年8月まで当院ではコロナのクラスター発生及び病棟発症ゼロです。私自身、任を務める茨城県医療構想委員会の責を感じています。当院への急性期病院からの転院が滞ると、急性期病院が救急患者の病床の確保が不可能になるからです。地域のみならずTX沿線の関東広域から全国規模で入院受入れをしている現状、未だ去らぬコロナ禍の中、職員一同奮闘しております。私たちが実践するリハビリテーションを一人でも多くの人が享受する事ができれば幸いと思います。

2020年度 当院実績

■2020年度 在宅復帰率（退院実績）

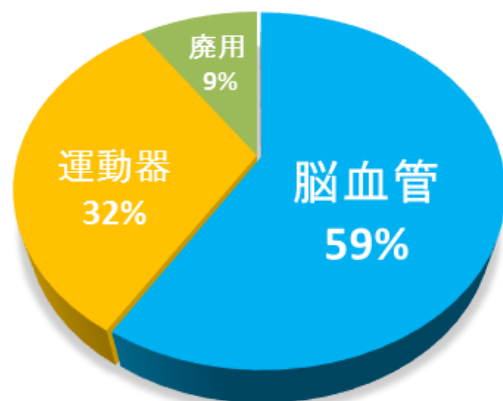
在宅復帰率	重症患者の受入
83.6% (70%)	46.3% (30%)
リハビリ提供時間	重症患者の回復率
170分 8.57単位	67% (30%)

※()内は厚生省の定める条件



■2020年度 新規入院患者数疾患毎内訳

脳血管疾患		廃用症候群	
59%		9%	
運動器疾患		実績指数	
32%		44.90%	
	脳血管疾患	運動器疾患	
入院時FIM	51.2	64.4	
退院時FIM	79.6	94.8	
改善点数	28.4	30.4	



※FIMとは、機能的自立度評価法のこと、患者様の日常生活動作(ADL)の自立度を示す指標で世界的に広く用いられるスケールです。食事、排泄、移動などの運動項目(13項目)とコミュニケーションなどの認知項目(5項目)から構成され、7段階で点数化し、その合計点を表しています。最低が18点、最高が126点で、点数が高いほど日常自立した生活が送れていることを示しています。

嚥下診療における当院の特徴

当院の取り組み

昨今、誤嚥性肺炎を繰り返す難治例や他院で経口を望めないと判断された重度の嚥下障害を呈した患者様のリハビリテーションや、検査目的で入院される事例が増えてきています。このような背景から、高度な知識や技術を求められることも少なくなく、当院では嚥下の専門的診療を行い、嚥下診療を病院全体で取り組み、力を注いできました。



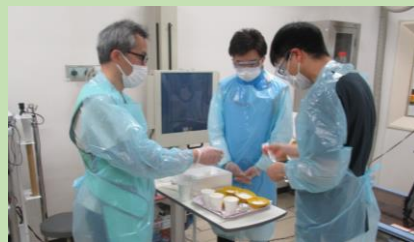
歯科衛生士による口腔内衛生管理

嚥下機能を向上されることはもちろん大切な事ですが、安心安全な嚥下診療を円滑に行っていくためには、誤嚥性肺炎を徹底的に予防していくことが非常に重要となります。そのためには歯科衛生士の活躍が不可欠であり、当院では言語聴覚士とともに歯科衛生士が2名在籍し、チームに加わっています。常に口腔内を清潔に保ち続け、誤嚥性肺炎をしっかりと「予防する」という観点の下、歯科衛生士は機能的口腔ケアや、歯磨き指導、間接的嚥下訓練等を実施し、言語聴覚士や看護師、委託訪問歯科と連携を図りながら、摂食機能療法を提供しております。



外部医師による嚥下回診

「嚥下診療では嚥下造影検査と嚥下内視鏡検査をして、患者さま本人の嚥下障害の程度を評価し、直接訓練、食べ物を食べる時の条件の設定を行うことが主な仕事です。茨城リハビリテーション病院では、医師・言語聴覚士・看護師等、多くの方が嚥下回診にご参加いただき、一生懸命関わってくださっています。バルーン拡張訓練・簡潔経口食道栄養等、新しい試みに挑戦できるところが茨城リハビリテーション病院の強みだと思っています。」



臨床経験豊富なST

嚥下診療において医師の指示の下でコーディネート的な役割を担い、中心となって評価や訓練を担うのが言語聴覚士という職種になります。当院ではその言語聴覚士が14名所属し、臨床経験10年以上のベテランが半数を超えており、バルーン拡張法をはじめとした、機能向上に向けた質の高いリハビリテーションを提供できる体制が整っております。



難治例でも食べる機会を逃さずに、いつまでも食べていける方法を患者様やご家族と一緒に模索し続けること、これが何より大切であると考えています。



入院までの流れ

リハビリが必要な状態になったらまずはご相談ください。

<STEP1> 入院相談

総合相談センターにお電話（直通番号：0297-48-6257）にご連絡下さい。患者様のご様子を詳しくお伺いし、診療情報提供書などの必要書類をいただきます。



<STEP2> 判定会議

いただいた情報を基に、当院へ入院が可能かどうか、症状や社会的な部分も含め総合的に検討いたします。判定会議は月～金曜日（祝日始は除く）毎日行っております。



<STEP3> 家族面談

判定会議で受け入れ方向となった場合は、患者様のご家族と面談をさせていただき、患者様の様子を伺います。また当院の説明を行い、病院を移る不安を少しでも軽減できるよう努めてまいります。

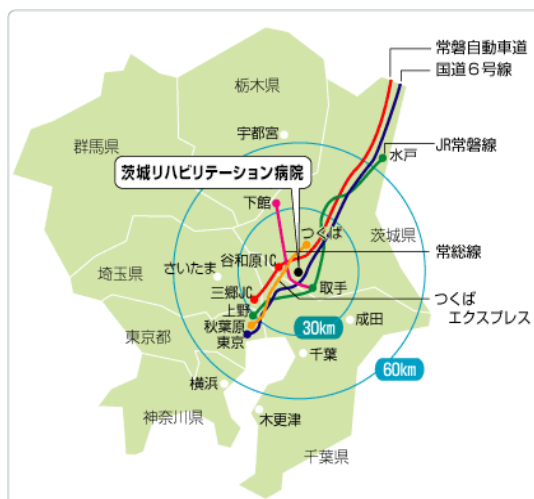


<STEP4> 入院決定

ホームページのご案内

病院の詳しい内容は、ホームページでご覧いただけます。ホームページには、病院紹介のほか、入院時に必要な書類等もダウンロードできます。毎月更新されるブログには、各部署からのさまざまな情報が発信されています。

リハビリテーション部監修の介護動画『楽々介護』も配信スタートしました。ぜひご覧ください。



交通アクセス

1. つくばエクスプレスで「守谷駅」下車後、【東口】ロータリーへ。
2. JR常磐線／地下鉄千代田線で「取手駅」へ。関東鉄道常総線に乗り換え「守谷駅」下車後、【東口】ロータリーへ。
3. 守谷駅からタクシーで5分。無料送迎バスもご利用ください。